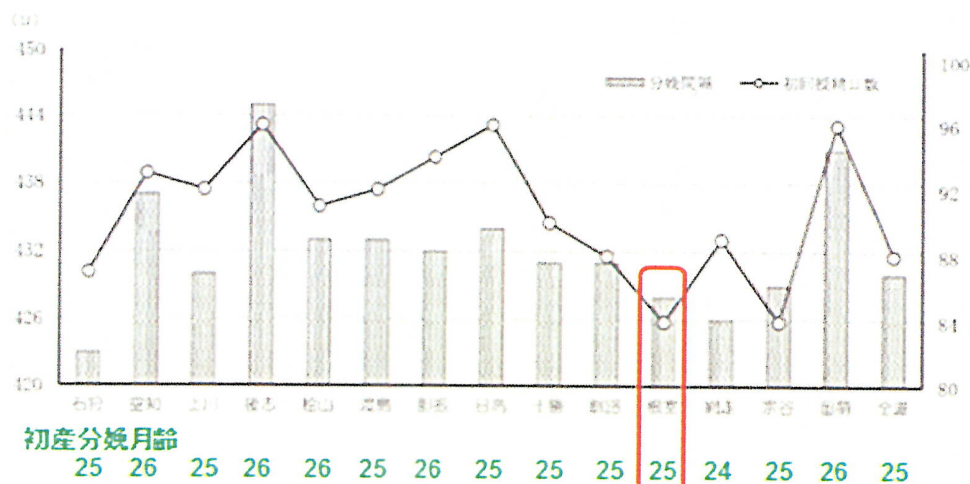


～ もっと発情を見つけよう ～
繁殖管理が低迷したまま維持されている？

道内の繁殖成績 分娩間隔と初回授精日数



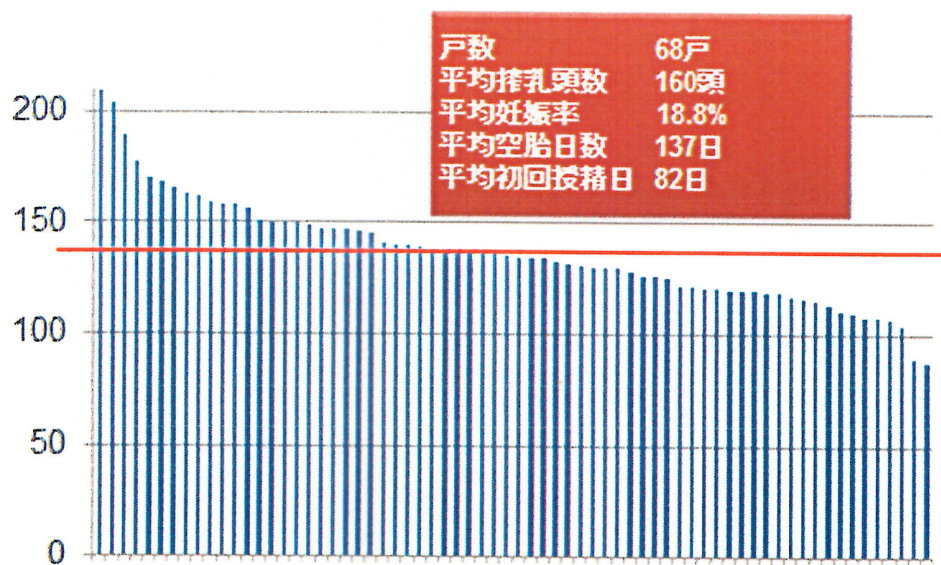
(北海道酪農検定検査協会 HP)

こちらは北海道各地域の繁殖成績となっています。道内でみると根室管内はそこそこ上位なようですが、その成績は決して良好とは言えません。

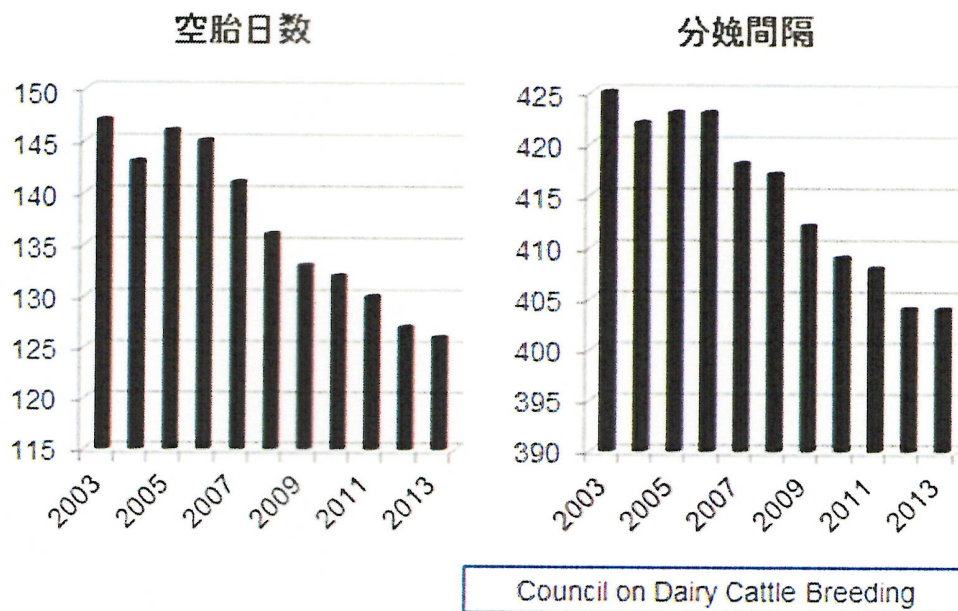
空胎日数：150 日 分娩間隔：429 日 初回授精日数：84 日 初産分娩月齢：25 か月齢

下は当社の繁殖検診農場の空胎日数の分布です。平均をみると根室管内全体の成績よりも若干上回っていますが、良好な繁殖管理（空胎日数の低めの目標は 125 日くらい）を達成している農場は 1/3 ほどしかなくまだまだ改善の余地が残されている農場がたくさんあります。

当社検診農場の繁殖成績（空胎日数）



(平成27年12月時点)



ちなみに現在のアメリカの繁殖成績は上のようにになっており、2007 年ごろから急激に空胎日数・分娩間隔が短縮されてきており、空胎日数 125 日、分娩間隔が 400 日にせまる勢いです。

繁殖成績がなかなか改善されないことの原因は、おそらく繁殖成績が改善されても結果（収益アップ）がすぐに現れづらく見えづらいからというのが第一でしょう。また現状でそれなりに農場経営が回っているため、手をかける（発情発見のための時間を作ったり、積極的なホルモン治療をしたりなどの投資の）必要を感じないのかもしれませんが、繁殖検診を取り入れていることで安心してしまっている農場（発情発見をほとんどせず、2 週おきのホルモン治療任せ）も見受けられますが、繁殖成績が良好な農場は検診をうまく活用して自身の繁殖管理に役立てています。

まず空胎日数や分娩間隔が延長することで、本来得られはずであった収益を得られていないということは強く意識する必要があると思います。国内でもさまざまなところで試算されていますが、空胎日数は 1 日延長することで 1,100～1,800 円の損失だと言われています。1 周期発情を見逃し、次の周期を待つことはその時点で約 30,000 円損していることを知しましょう。周期を待たずに早く発情を来させるために PG を使用するコストは 1,000 円、より受胎率を上げようとオブシンク（CPC）をしても 2,000 円の薬代しかかかりません。

こういった授精が遅れた牛が集まって例えば平均空胎日数が 150 日の 50 頭規模の農場があった場合、年間約 210 万円の損失していることになります。まずは自身の農場がこれまでどのくらい繁殖成績の低迷で損をしているのか計算してみてもいいでしょう。

空胎日数からの経済損失評価

1,200円/日 × 損失ポイント × 頭数 = 年間収益損失
 （牛群平均空胎日数 - 115 = 損失ポイント）

例：50頭で平均空胎日数150日の場合
 → 1,200 × 35 × 50 = 210万円の損失